

神の心は深く、その手は長い

「イエスは天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」、そう今日の箇所は始まります。ここには気になる表現があります。この「イエスは天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」とは、福音書記者ルカが記した場面転換にあたる説明です。つまり、ここから主イエス・キリストのエルサレムにおける受難がいよいよ射程に入ったという宣言なのです。今日の箇所は9章で、実際にエルサレムに入られるのはルカでは19章、十字架の死は23章に描かれます。それが「天に上げられる時期が近づくと」という表現が意味することですが、ただ原文のギリシア語はもう少しニュアンスのある言い方をされていて、ここにはキリスト教の独特な時間理解と申しますか、神のご計画のもとにあるわたしたちの生命を垣間見させる表現がされているとわたしは思うのです。幾つか別の聖書の翻訳と比較しましたが、このニュアンスを伝える訳としては聖書協会訳の「天に上げられる日が満ちたので」というのがよいと思います。ポイントは「日が満ちる」、つまり「時が満ちる」という表現です。これは信仰と深く関わりのある表現と言わなければなりません。信仰とは基本的に待ち望む姿勢と切っても切り離せないからです。「時が来れば」とか、「その日がくれば」といった表現を聖書の中にわたしたちは幾つも見出すことができます。苦しみが終わる日、希望が叶えられる日、祈りの課題が解決される日など、さまざまわたしたちにとって特別な時を神さまが見ておられ、備えておられる。その特別なご計画が満ちる日を待ち望みつつ、わたしたちは生きています。そういう時の理解の仕方です。時が満ちるとはそういう意味です。そして、イエスさまにその日が

来る。「天に上げられる時期」とは、神さまが、イエスさまの上にご計画をなさった特別な時という意味であり、その日が満ちたことを知って、イエスさまは天に上げられる場所であるエルサレムへ向かう決意を固くされたのです。ここもエルサレムに彼の顔を向けてと、顔という単語が使っています。それはみずからの使命に直面する、その存在がかかっている。それほど覚悟をもってエルサレムを見据えている。それまではユダヤ全土を巡回するような形で町々や村々へ神の国の訪れを告げておりましたが、今後はそれにエルサレムへ、しかも時が満ちて上げられる時というご自身の死を見据えて進むゴールを、イエスさまは歩もうとされ始めたと、福音書記者ルカはここでその使命と目的をはっきり記したのです。ただその道行きは平坦なものではありませんでした。さっそく躓きが起きた。それがサマリアで歓迎されないという出来事になっています。前途多難な状況が示されている。事態はおそらくこうです。主イエスはエルサレムへの道筋を確かなものにしようと、弟子たちの中から先に使いの者たちを出したのです。イエスさまの一行はざっと見積もっても100名近くはいたでしょうから、宿の手配や食料・水の確保、また安全に旅するための情報収集が必要でした。ところがエルサレムへのルートに位置するサマリア人の村の人たちはイエス様を歓迎しなかったというのです。ここにはわたしたちには理解の難しい歴史的事情があります。ルカがターゲットとしていた地中海世界の読者たちもそこまでユダヤの歴史的状況に通じていたかは分かりませんが、かいつまんで説明すれば、サマリアはかつてエルサレムと並び立つイスラエルの都だったのです。イスラエル王国がソロモン王の死後南北に分裂したとき、北王国はサマリアを都とし、南王国は引き続きエルサレムを都としました。両王国が並び立ったのは100年少しで

すが、その後、北王国は古代オリエントの覇者であるアッシリア帝国に滅ぼされます。南のユダ王国もエルサレムの喉元まで攻め込まれますが辛くもこの時は難を逃れました。ただ占領地となった北王国の都のあったサマリア地域にはアッシリア帝国による鉢植え政策によって異民族が多数入り込んだのです。これをユダヤ教徒たちは嫌って、その後の数百年間の歴史の中で生粋のユダヤ人たちはサマリアを避けるようになった。そういう経緯があります。一方のサマリアに居住する人々も、エルサレム中心主義、特にエルサレム神殿に対して独自の救いの場所を打ち立てておりましたから、そこにも確執があったのです。こういう訳でしたから、エルサレムを目指して進もうとする決意を新たにされたイエスさまとその一向に対して、サマリア人たちが自分たちには関係のないこととしてあしらったのも無理のないことではあったのです。そこには長い年月をかけて割かれてしまった民族の複雑な事情があったのです。だから弟子のヤコブとヨハネもそれに敏感に反応してしまうのですね。「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と物騒なことをいいます。弟子たちはイエス様が歓迎されないことが我慢ならなかったのでしょうか。自分たちもイエスさまの運動に入れ込んでいますから、自分たちもないがしろにされていると憤ったのかもしれません。自分たちがすごい、自分たちが良いことをしていると思っている時、それに賛成してくれないと不快に思うというのは、わたしたちにも思い当たることがあるのではないのでしょうか。自分に味方しない者は敵だという考え方に飛びつかないように注意が必要です。特に、わたしたちの日常にはやり場のない怒りが満ちていますから。いみじくも弟子たちが「焼き滅ぼしましょうか」といっていますが、炎上という本来はインターネット上の誰か、あるいはその人の

発言に対して批判的なコメントが殺到する場合に使う言葉ですが、こういう炎上というケースを見聞きするにつけ、こう何かマグマのようなぐつぐつと煮えたぎる不満がいつもはけ口を求めている、何かとっかかりや、叩いてもよさそうな対象を発見すると見境なく攻撃にまわる状況が当たり前の日常にわたしたちも生きています。今日の説教題は「神の心は深く、その手は長い」とつけさせて頂きました。ヤコブとヨハネがサマリア人の村を焼き滅ぼすことを天に願いましょうか、と言ったのに対し、イエス様は振り返って彼らをたしなめられた。バカなことを言いなさんと遮られた。そこには、わたしたち人間の、言ってしまうと見の狭さ、心の余裕の無さ、怒ることに早く、許すことに遅い性質、同じことをやっても自分や身内には甘く、他人には厳しいといったわたしたち人間の持つ弱さや至らなさといったものが噴き出ている。ダダ漏れですね。受け入れられないことを受け入れられないわたしの弱さを思います。受け入れられないことを受け入れ、赦されるキリストの忍耐と寛容を思います。キリスト・イエスはその顔をエルサレムに向けています。そこで自分をわたしたちの代わりに犠牲としてささげ、すべての人が神の前に礼拝をすることが出来るように、ユダヤ人もサマリア人も異邦人もそうした区別が一切なくなり、神を父と呼んで礼拝する時をもたらすために十字架にかかろうとしています。サマリア人もユダヤ人も歴史的な出来事がもたらした負の遺産から自由ではない。しかし、過去を変えることは出来なくても未来の選択は別です。いま歓迎しない彼らを焼き滅ぼすのではなく、ご自身を滅ぼしてみなをひとつにするためのキリストの時が満ちようとしている。そこに神さまの深く、広く、大きな御心があります。わたしたちは近くしか見ることが出来ない。すぐに結果を求めて生きる。しかし、神さまの手

は長く、もっと遠くを、歴史の完成を見ておられるのです。自分たちの植えた木を切り出して、木材にするのは孫の世代だという森を管理する人の話を聞いたことがあります。今の働きの実りに与るのははるか先の世代である。しかし、いま自分たちを養っているのも将来の世代のために日々労苦した自分たちの先達の働きであることを知っている。そういう感覚をもつことがわたしたちにも必要ではないでしょうか。時が満ちるのを期待してまつ信仰の姿勢です。彼らはサマリアで歓迎されなかった。しかし、主イエスは憤る弟子たちをたしなめ、先に向かわれました。そして、この直後にルカによる福音書でもっとも有名な譬え話「善きサマリア人」を話されるのです。ここにも主の深い御心があるのではないのでしょうか。強盗に襲われ、傷つき倒れた瀕死のユダヤ人を助けたのは同胞のユダヤ人ではなく、敵対していたサマリア人であったという、あなたの隣人は誰かという有名な話です。この譬えは、先入観や偏見、感情を優先する弟子たちへの解毒剤の働きをしたのではないのでしょうか。少なくともイエスさまはこのように広く、大きく、自由な心をもって、わたしたちすべてを憐れみと慈しみの目で見られて。そのような方と出会い、従い、わたしたちが創り変えられることに、救いの喜びがあることを知っていただきたく願います。

お祈りいたします。